

ひよつとこ飴ほしいと ころころ虫鳴いてる  
さつさ飴ばば 塔婆の蔭で若衆待ち待ち 寝返打 ぶつてる

### 山の小屋

稗をつつつく ひよどりさん ひんといもなく 駒鳥さん  
がつちがつちと がつちさん 山の小屋から 覗いてた

### 猿の尻

夕焼鳥が 屯する 山邊 柿村 稻の庵  
浴穂拾ひの 鶏兒め 離 禿山 猿の尻 眞赤いぞ

(註) 離山は信州の山の名 稻の庵は 田の中に積んだもの

### ぎつちのもんず

ぎつちの百舌鳥 みしんやさん  
ぎつちぎつちぎつち みしん 踏んでる  
つつべえ日雀は 型へ入れて  
つつべえつつべえ 足袋を 叩いてる

### きりぎりす

苺の原のきりぎりす いちいちぎつちよん とんばさり  
苺 織り出し 機を踏む  
南瓜畠のきりぎりす かほかほぎつちよん ちんばたり  
南瓜日盛 織りきれぬ

胡瓜の棚のきりぎりす きゆりきゆりぎつちよん てんはたり  
胡瓜を織つて およなべだ

ダ リ ヤ

にはのダリヤは お水がほしい 喉がかわいて お水 ちやうだい  
そこでお水を やつたらば ダリヤは きれいな 花もつた  
ダリヤが咲いた ダリヤ ダリヤ  
ダリヤがありがと いつてゐる お水をくれて どうもありがと

小 蟻 さ ん

小原の小茨の小蟻さん  
小雨が ばらばら 降つてきた

ばらばら小雨で 流された 小原の小茨の小蟻さん

一 本 杉

俺は 野中の 一本杉  
風はびようびよう 雪 くるくる  
早く春を呼んどくれ  
子供に脂を 上げよもの 子供に 枯枝 上げよもの

葡 萄 と 坊 や

葡萄よ 手を出せ 蔓のばせ  
つぶつぶ葡萄の丸い粒 棚から ふさふさ 笑つてる  
坊やよ 手を出せ 頸のばせ

つぶつぶママの 白い乳 胸からふさふさ 笑つてゐる

### なれなれ木の實

杏になつた 杏の實 葡萄になつた葡萄の實

林檎の木には 林檎がなつた 梨の木には 梨がなつた

石榴の實もなれ 無花果もなれ 坊やは夢で 大人になつた

### 星

星星 野原の赤い薔薇 帽子のへりを 飾つてゐる

星星 ねんねの可愛い鳩 お屋根のふちを 飛んでゐる

星星 幼稚園の 子供たち 棚に 靠れて 遊んでゐる

星星 ねんねのよい坊や ねんねころりと眠る時 天でびかびか 光つてゐる

### 人形の白粉

お人形ちゃんのお顔に 白粉つけちゃつたの

たくちゃん たくちゃん ついてまぢゆ

お人形ちゃんのお顔は ばつちくなつちやつたの

だからお人形ちゃんのお顔に おしろいつけて

お人形ちゃん きれいにしてあぎよう

### 提燈屋さん

提燈 提燈 提燈な

「でつかい提燈 兄ちゃんの ちつちやい提燈 嬢ちゃんの」

「提燈張るのは 苦しいな 嬢ちゃん 註文 取つてこい」

「兄ちゃん 走れば 熱いよ」 「油を塗るのは 尙更だ  
骨を削つて 紙張る丈でも 汗はだくだく これこの通り」  
干るのも早い 上燈籠じやうとうろう

盆 盆とても 今日明日ばかり 明後日は野邊の干枯草ひやれくさ

「兄ちゃんせいだせ えつさつさ」 「嬢やも手傳へ えつさつさ」

### 栗の花と小人

橋の下から 出て来た小人 腰に手を當て 背伸して  
人がくるかと きよろきよろ眼 栗の花散る 午下りひるさげ  
田作 畑で ぐうぐう 軋びび そこで小人ら 蔓かぶりづく  
むすぶ薬しやくふり わはわは笑ひ 蜜蜂のよに 呻り出す

### ダリヤの涙

— 貧しい子のみた夢 —

わたしやダリヤを 思つたら 夢で咲いた

月の明あかりに 紅々と 光つてゐた

あら不思議など 手折つたら 涙が出た

ダリヤの目から ぴかぴかと 涙が出た

### 笛吹き雀

大佛さまの お耳には

笛吹き雀が 笛を吹く びつころ びつころ 笛を吹く

大佛さまの お鼻にも

笛吹き雀が 笛を吹く びつころ びつころ 笛を吹く

大佛さまの お手手にも  
笛吹き雀が 笛を吹く みんなで びつころ 笛を吹く

筏 乗

流せよ 筏を 鉢巻で  
山から海まぢや まだ遠い  
危い命を あやつつて  
辛さしや 涼しい 風が吹く

(終り)

跋

詩集の奥書で、鯨鉦張つてゐるのは妙なものだ。殊に詩論の如き難しい問題を述べるのは野暮でもある。ただ假にも斯かる詩篇を一本として公にするには何等か一言、申譯の詞を書添へないと作者の心持は濟まないのである。

收むるところの詩篇六十四、民謡六篇、童謡四十六。全篇悉く既刊の詩集に入れずに藏めておいたものである、とは云へ又全篇悉く一度は孰かの讀者の眼目に曝されたもの、嚴密な意味では既う一個人の所有以外のものである。然るに、此の拙い乍らの蟬の歌なり蟋蟀の歌なりを綴合せて一冊をなしたに就いては、作者と云う概念を全然離れて、一度は編纂者の立場からの辯明をしておく必要を感じたのである。

例へば「牧歌」は私が五高へ赴任して、水前寺公園へ子供を遊ばせに行くうち、其處の池に翡翠を見出し、渡鳥を迎へ、且代々木時代の寓居と寓居の近邊の泉に來た翡翠と遠い鶯鳥の聲などを思浮べて作つた私の最新の詩で、五高生の詩雜誌「翼」へ載り、中越へ來てから、此處の生徒の文藝雜誌「北路」へ再び掲げられたものである。「蝸の歌」は「現代」創刊號に卷頭論文の次あたりに飾出され、郷里の中等學校編纂の教科書に錄されてゐると聞く。「べあとりのいちえに」並びに「蟬の蛻」は大正九年三月及び二月の讀賣新聞日曜附録の上段に、がるた紋章や麗しい框付で發表されたもの、後者は或る教科書に、漱石鵬外の如き大家の文と一緒に載つてゐるさうである。「麓の沼」は當時記者たりし川路柳虹君が太陽へ間違つたのか掲載してくれたもの、「出來事」は文章世界が改題されて新文學となつた創刊號に鮮かな面目を施して出現したものの。「時の歌」は二つの地方同人雜誌を廻つた後で八波教授が師範教科書に採用なされたもの。一々の誕生、戸籍、經歷を並べれば切れない話である。他のものは讀賣、朝日、日日の諸新聞 大觀、解放、人間、現代、日本

詩人、著者發行の「詩聖」及び「地靈」其の他の同人雜誌に載つたものである。

私の第一詩集の「こけもも」が出來たのは今から九年前の大正八年であつた。其の頃岡山で出來た「時の歌」「山茶花」「旭川のすけつち」「價しき月と涙」「旅の曲」「月に寄す」又それ以前の作で、「こけもも」に洩れた「契」「雪」「菊に寄す」等は最も初期のものである。其の後八年の暮東京に舞戻つて「民謡詩社」を興したが此の時代に岡山時代に胚胎してゐた「べあとりのいちえに」「蟬の蛻」「出來事」「聖き雀の歌」「正義の歌」「回々教の僧」「水上亡靈の曲」「秣の中の蟋蟀」「銀杏法師」「摩訶の娘」等が成熟し、若しくは成熟しかけてゐた。新しくは「小僧鼓入の歌」「蝸の歌」「田植歌」等が此の時代に殆ど偶發的に産出したと思ふ。

右に次ぐ足掛四年の快活にして暗澹たりし本郷の下宿生活に於ては前述の二篇を除いて「時の歌」の一括中の全部、及び「物質分裂の悲曲」「創造の歌」「古い土手」「日雀」「飛行機上のけえて」「麓の沼」、落穂中の一篇を除く全部、「月の言葉」の一括中「風鈴に寄す」迄の全部を作つた。あの風鈴は隣の下宿の軒に實際吊下けてあつたものである。此の時代の最も

初期に出来た詩は「猿廻し」「拾ひもの」であつたと思ふ。

次いで代々木時代となるが、「地靈」一括中の「復活の谷」以下「蠅」迄及び他の項目中の「燕」は此の時代に屬する。「月の言葉」「偶像」「港にて」は前時代と此の時代との過渡期に生じたもので、前二篇は千駄ヶ谷の知人の家に寄寓してゐて作り、後者は東京府立一中の教員として沼津桃郷の同校海水浴場で作つたもの。それから「地靈」「影法師」「散步」「輪廓」「腐肉」「こんこんま」「火星の彼方」は代々木時代に次ぐところの雜司ヶ谷時代の收穫である。最後の一篇は大震災の翌年嬰兒の療養を目的として三浦三崎に海水浴に行つてゐて出来たもの。時恰も火星のおつほじしよんを示す時で私共夫妻と子供とは嚴しい颯風の中に砂山を攀ぢてゐた。此の時代以後の作では熊本時代的一篇「牧歌」を加へたに過ぎない。

「こけもも」發市後九年目、其の間極めて稀な時機に、而も極めて異つた動機の下に産出して、更に、全然異なる戸籍簿に點在して、閱歴を異にしたこれらの詩篇である。今これ

らを纏めて二本の中に雜居せしめると、家長は、家子郎黨を如何様に配置せしむべきかを辨へない。年代順では顔が合はず、顔の合はない詩を並立てる事は叶はない。因て私の嫌ひな年齢には一切無頓着に似合の顔を一括となして、兎も角、順序を定めたのである。

大正九年「民謡詩社」を興し「詩聖」を發行し、新民謡の第一聲を私が發つた時は、現今民謡の研究者である人も疑問の眼を見張り、現今民謡作家である人も未だその何たるかを自覺しなかつた感が私にはされた。私が民謡を唱へた主旨は俗曲俗謡を習ふとか作るとか云う意ではなくて、隠れた民の聲を調べ、佛羅西流にあらずして日本流を、古今調にあらずして萬葉調を、技巧歌に對しては自然歌を、蕪村に對しては芭蕉を、センチメンタル歌に對してはナイイブ歌を作れと云うにあつた。その爲にはホメロスとゲエテと、メリタと萬葉と芭蕉などを習へと云うにあつた。現代人が個性を没却して何處に詩作の價値があらう。詩人が俗謡を讀し之を蒐集し研究批判する事は大いに有意義であるが、只に其の卑俗なる曲律を模し、本來の自己の詩の面目を失ふならば面白くなからうと思ふ。

私の詩は民謡を志しても決して一般向ではない。それに、一度發表し、之を二集と成し上木して脱皮の祕術を施せば、これは當然私以外の所有に歸したものである。私は此の詩集が、にも拘らず公となり切らず、公に適せず、依然として私一個人の所屬である事を感じる。でも、あの處女詩集發刊當時に於けるやうな滑稽な自負や興奮は今は何處へ去つて終つたか！ そんなものが無い丈に今度は幾分寂寞を感じる。面白くもない空疎な「詩壇」とは妙に關係少く、尙且、近年、自ら強いて遠ざかる工風と傾向とを示してゐた私の心境に於ては、他の多くの詩人達よりも一層よく自己と詩との間を客觀出來ると思ふ。その今日、私が詩集を出すに就いても、之を冷然と送り不相應なる期待を一切捨去つてゐる事は自ら明かであらう。

卷末に附した童謡四十六篇は「フリヂヤ」若き日影」中に含まれてゐる他の童謡と一緒に「弄具の日本橋」と題して震災前製本が完了してゐて九月勿々發刊の豫定の所、あの大地震火災に遭つて灰燼に歸して終つたものである。私の童謡は私の民謡の一部分である。だ

から私は童謡として苦心を重ねて作つてゐる。割に理解されてゐないのは餘計な苦心をした爲かも知れない。でも、山田耕作、本居長世の諸氏は早くも私の童謡の爲に好意を示してくれた人達である。だが私の童謡を本當に理解してくれる人は未來にある氣がしてならない。此の事は私の童謡以外の詩に對しては尙更云へる事である。

昭和二年九月十五日



昭和貳年十二月十五日印刷  
昭和貳年十二月廿五日發行

裝本品

定價金壹圓五拾錢

著作者

藤森秀夫  
東京市神田區今川小路一丁目四番地

發行者

福岡益雄  
東京市牛込區早稻田區池袋町三六二番地

印刷者

關根慶寬  
東京市牛込區早稻田區池袋町三六二番地

印刷所

金星堂印刷所  
東京市牛込區早稻田區池袋町三六二番地



發行所 東京市神田區今川小路一丁目

金星堂

電話九段二九六九番  
池袋東京五三二八番

新進作家創作集

呪はしき生存

宮田重雄裝四六上製  
定價二圓送料十二錢

佐々木味津三氏著

春の外套

芥川龍之介裝四六上製  
定價二圓送料十二錢

佐佐木茂索氏著

瘦せた花嫁

吉村二郎裝四六上製  
價一圓送料八錢

今東光氏著

幸

福

藤井達吉裝四六上製  
定價二圓送料十二錢

宇野千代氏著

生活の花

吉村二郎裝四六上製  
價一圓送料八錢

十一谷義三郎氏著

新進作家創作集

感情裝飾

吉田謙吉裝四六上製  
價二圓送料八錢

川端康成氏著

伊豆の踊子

吉田謙吉裝四六上製  
價二圓送料八錢

川端康成氏著

鷗(かもめ)

柳瀬正夢裝四六上製  
定價二圓送料十二錢

金子洋文氏著

理髮師

柳瀬正夢裝四六上製  
價一圓送料八錢

金子洋文氏著

愛の挨拶

吉田謙吉裝四六上製  
價二圓送料八錢

横光利一氏著

代 表 的 抒 情 詩 集

■ 蘆 笛 川路柳虹氏著

菊半截型假裝・定價六十錢・送料六錢

■ 憧憬の丘 白鳥省吾氏著

菊半截型假裝・定價七十錢・送料六錢

■ 戀愛小曲集 正富汪洋氏著

菊半截型假裝・定價六十錢・送料六錢

■ 耽 視 高橋元吉氏著

四六版上製寫真入・定價二圓・送料十錢

代 表 的 抒 情 詩 集

■ 美 想 曲 高群逸枝氏著

菊半截型假裝・定價六十錢・送料六錢

■ フリヂヤ 藤森秀夫氏著

菊半截型假裝・定價六十錢・送料六錢

■ 黒い蝶 川路柳虹氏著

竹久夢二氏裝幀菊半上製・定價壹圓・送料六錢

■ 海の聖母 吉田一穂著

龜山嚴夫裝・四六判箱入上製・定價一圓・送料六錢

代 表 的 抒 情 詩 集

■ 北風と薔薇 百田宗治氏著

菊半截型假裝・定價六十錢・送料六錢

■ 若き日の夢 松山敏氏著

菊半截型假裝・定價六十錢・送料六錢

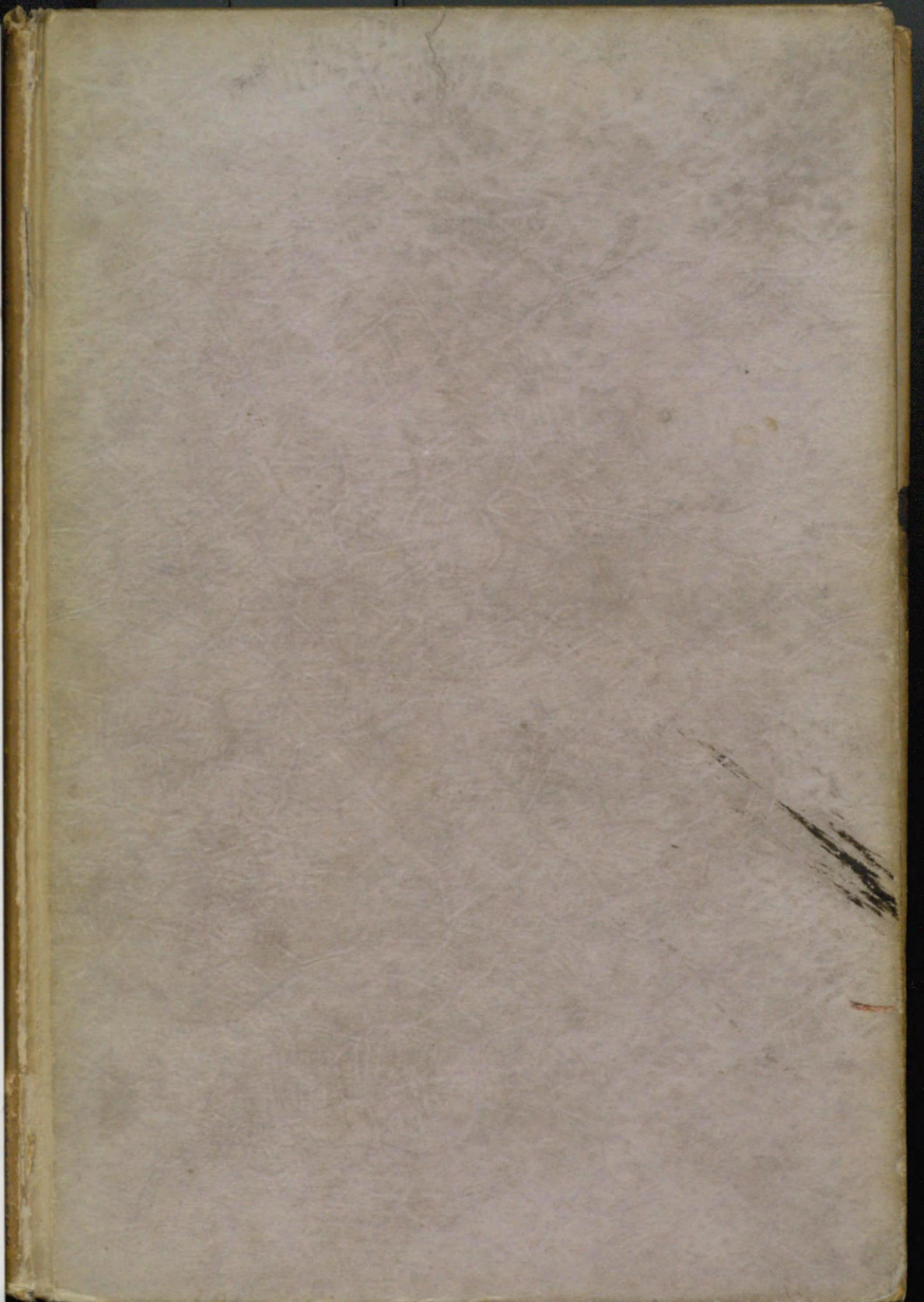
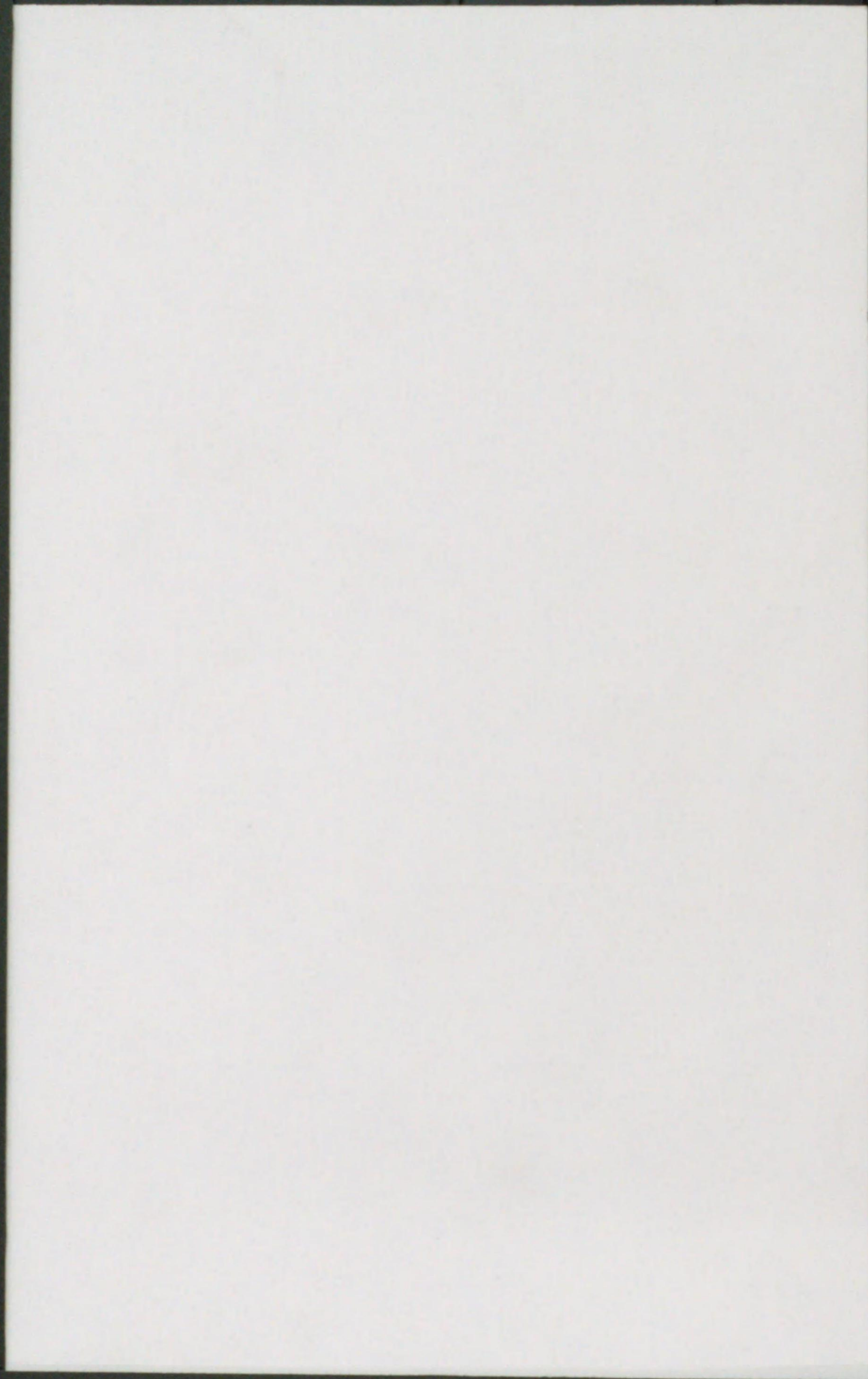
■ 爪色の雨 佐藤八郎氏著

吉邨二郎氏裝上製・定價一圓・送料六錢

■ 童謡 黄金の蒲公英 白鳥省吾氏著

武井武雄氏裝上製・定價一圓・送料六錢

529  
236

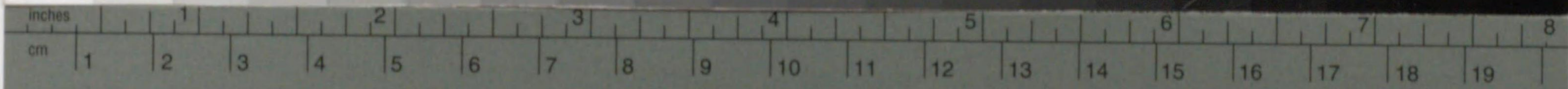


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

